

## 「カラスウリの色」

植物の実は、およそ熟すと色が変わります。それは草本(くさ)でも木本(樹木)でも同じです。キュウリは緑のままかという、収穫せずにそのまま畑で育て続けると、黄色から橙色に熟します。ドングリも最初は緑色ですが、だんだん茶色に色づきます。その中で、最も劇的に色が変わる植物は、恐らくカラスウリでしょう。

カラスウリは夏の夜に、レース状に広がった、真っ白な美しい花を咲かせます。スズメガのような口吻(蜜を吸うストロー状の口)が非常に長い蛾に、花粉を媒介してもらっています。決して珍しい植物ではなく、東京でも普通に見られます。生垣などに好んで蔓(つる)をのぼすので、よく観察しないとわかりませんが、雄株と雌株が別々の植物です。冬もふくらんだ根(塊根)が地中に残るので、毎年同じ場所に繁茂するのが特徴です。私の職場にもたくさんあって、子どもたちのいい観察対象になっています。



「カラスウリ六態」 (お茶の水女子大学構内で採集)

カラスウリの実は最初緑色で、瓜坊(イノシシの子ども)のように模様がありますが、熟すと消えます。実は黄色→橙→赤と鮮やかに変化し、やがて茶色くなって枯れます。



私は、試しにカラスウリの実を食べてみたことがあります。果肉はツルレイシのように、各種子を包み込んでいます。妙な甘苦い味で、まずくてムリでした。ただ種子は、昆虫の顔のような面白い形をしています(左写真)。カラスが食べるのかと思って、気を付けて見ているのですが、カラスがつついていてのを一度も見たことがありません。しかし、写真一番右のように、つつかれたあとのある実もよく見るので、カラスウリを好む鳥もいるのでしょう。晩秋の晴れた日、子どもたちとカラスウリを探すのは、とても楽しいです。

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)